

**2016**

**第69回 東北地区歯科医学会  
プログラム**

会期／平成28年11月5日(土) 14時～18時

6日(日) 9時～13時30分

会場／宮城県歯科医師会館 5階 講堂

仙台市青葉区国分町1丁目5番1号 TEL 022 - 222 - 5960

主催 東北地区歯科医師会連合会





## 挨拶

東北地区歯科医師会連合会  
(当番県)宮城県歯科医師会

会長 細谷 仁 憲

第69回東北地区歯科医学会学術大会を当番県として開催するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

本学術大会は、これまでの関係者のご尽力により、東北地区の歯科医師会並びにその会員・大学・その他歯科医療関係者の日頃の研究や臨床症例等の発表の場として、また意見・情報の交換及び知識・技術の研鑽の場としての役割を果たし、当地区の歯科医学の進展に寄与し、歯科保健・医療の向上に貢献してまいりました。

近年、歯・口腔の健康が全身の健康に、また健康寿命の延伸に大きく関わっていることがエビデンスに基づいて次々と明らかにされつつあり、それに伴って8020運動も国民運動になって推進され、8020達成者率は40%に達するまでになりました。高齢者の現在歯数は確実に増加しつつありますが、高齢化の進展によって高齢者が増加し、達成者も未達成者も絶対数は増加していくこととなります。

国は今後健康長寿社会の構築を目指し、健康寿命の延伸を推進していきます。歯科においては、これを受けて今後8020運動を更に推進していくと共に、未達成者に対しても対策を講じていくことが必要になってくると思われれます。

そこで本学術大会では、東北大学大学院歯学研究科・分子・再生歯科補綴学分野の江草宏教授をお招きして、「iPS細胞が描く歯科医療の未来～これからの再生歯科医療への期待と課題～」を特別講演していただくことに致しました。先生は「近年の口腔インプラント治療は、ティッシュ・エンジニアリングの概念を積極的に取り入れ「インプラント・再生治療」として更に発展を遂げ、その適応はこれまで困難であった症例にも拡大しつつあり、本講演では再生歯科医療の現状と最先端をお伝えすると共に、iPS細胞に期待される近未来の歯科技術について夢のあるお話をしたい」とおっしゃっています。未達成者及び歯牙欠損の有る方にとっては特に興味が湧く講演になると思われれます。

一般口演は各方面から日頃の研究や臨床の36演題を応募いただき発表されます。活発な学術交流を期待しております。

開催にあたり、関係各位の多大なご尽力・ご支援に感謝申し上げますと共に多数のご参加をお願いし、実り多い学術大会となりますよう祈念し、ご挨拶と致します。



# 祝 辞

公益社団法人 日本歯科医師会  
会 長 堀 憲 郎

このたび第69回東北地区歯科医学会が盛大に開催されますことに心よりお祝い申し上げますとともに、当番県としてご尽力された宮城県歯科医師会細谷会長を始め役員の方々に深甚なる敬意を表します。

またご出席の会員の先生方には、平素より本会の会務に多大なるご支援を賜っておりますことに厚く御礼を申し上げます。

さて、我が国の公的医療保険制度は1922年の健康保険法の制定に始まる100年近い歴史があり、1961年にいわゆる国民皆保険制度を確立してから半世紀以上になります。一方、近年の急速な少子高齢化により、今から10年後には2025年問題と呼ばれる公的医療保険制度維持の危機に直面しており、更にその先には人口の減少問題が控えていることはご承知のとおりです。

この制度危機の中で、いかにして最後まで健康な生活を営める社会を作るのかが問われており、その延長上には「健康寿命の延伸」という国家的目標がおかれています。日本歯科医師会は、歯科医療の充実によってその目標達成に貢献できるという多くのデータを示してきました。我々は単に「健康」という概念を超えて、食べる、話す、笑うという「生活」の質の向上こそが、超高齢社会において求められるものと位置付け、そこにおいて歯科医療が果たす役割への理解を求めています。2年後の医療・介護同時改定においては、改めてしっかりとした方向性を示したいと考えております。

またそれらの歯科医療政策推進の前提として、歯科界自体の活性化が不可欠であることは言うまでもなく、新しい歯科医療技術、医療機器、医療材料の研究開発を歯科界の大きな課題と位置付け、強く推進して参る所存です。

本学会に出席される会員の先生方におかれましては、この研修の場において最新の知見を習得され日々の診療にあたられるとともに、そのような歯科界の将来を俯瞰しつつ、臨床現場を預かるお立場で多くのご意見を発信して頂くことをご期待申し上げます。

先生方の自己研鑽への真摯な姿勢に深く敬意を表するとともに、本学会が歯科医療の明日へ繋がるものとなり、大きな成功を収められますことをご祈念申し上げます。祝辞といたします。



## 第69回東北地区歯科医学会に寄せて — 学術大会参加の意義 —

日本歯科医学会

会長 住友 雅人

第69回東北地区歯科医学会が宮城県歯科医師会のご担当により仙台市において開催されますことを心からお祝い申し上げます。

最近では機会あるごとに、学術大会に参加する意義についてお話しして参加を促しています。出典は定かではありませんが、江戸時代、出島にシーボルトがいたころ、「江戸での勉学一年はいわゆる畳の上の兵法、長崎の勉強半年は真剣勝負、この2つのどちらが西洋医学を会得するうえでの早道か」というような問答が蘭学者の間で交わされたそうです。畳の上の兵法とはかなり乱暴な言い方ですが、そのころの長崎は、西洋文化と日本を結ぶ唯一の窓口でありました。約200年たった今日の歯科界にあてはめても、この問答は的を射るのではないのでしょうか。

現在の歯科医療の提供体制は歯科診療所が中心です。ここではどうしても自己評価の世界となりがちで、スタッフや周囲の歯科医師による同僚評価やいわゆる第三者評価を受けにくい環境にあります。問題は、それによって自己満足に陥らないとも限らないという点です。もちろん、畳の上の兵法ではなく、地域の医療活動に邁進する日々は大いに評価されるべきものです。しかしまた、私は、学術大会および同時開催される展示会場に足を運ぶことも勧めたいのです。半年の真剣勝負ではなく一日でも気軽に参加することにより、自分の診療環境、体制、技術などを時代の潮流と比較した確かな自己評価ができます。また自己研鑽を積むことによって社会が求める歯科医師に成長することも可能です。さまざまな地域、年代との交友を深めることもできるでしょう。

一方で、学術大会に参加しない人たちをいかにして勧誘すればよいのか、これは大きな課題です。来られない理由はさまざまでしょうが、ともかく来ていただかないと話になりません。まずは会員みなさまに、歯科医師免許という国家資格は生涯研修と歯科医療がセットになっているものだという認識を持っていただきたい。そこから始めましょう。

今回ここに集うみなさま方のますますのご活躍を期待すると同時に、一人でも多くの仲間をこの場に導いてくださることを願っています。

# 学 会 日 程

11月5日(土)	
13:00	開場・受付開始
14:00	開会行事
14:30	<b>特別講演</b> 「iPS細胞が描く歯科医療の未来」 ～これからの再生歯科医療への期待と課題～ 東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野 教授 江 草 宏 先生  座長：宮城県歯科医師会 常務理事 岡 部 太 一
16:05	【一般口演】 I 群(6題)
17:10	【一般口演】 II 群(5題)
18:00	閉 会
18:30	懇親会 (江陽グランドホテル)
11月6日(日)	
8:30	開場・受付開始
8:55	開 会
9:00	【一般口演】 III 群 (7題)
10:15	【一般口演】 IV 群 (6題)
11:20	【一般口演】 V 群 (6題)
12:25	【一般口演】 VI 群 (6題)
13:30	閉 会

(昼食は用意しておりませんので、各自でお願いいたします。)

# 開 会 行 事

■ 日時：平成 28 年 11 月 5 日(土) 午後 2 時

■ 場所：宮城県歯科医師会館 5 階 講堂

司会：宮城県歯科医師会 学術副部長 杉 山 豊

1. 開 会 宮城県歯科医師会 副 会 長 岩 渕 吉 昭

2. 挨 拶 東北地区歯科医師会連合会会長・宮城県歯科医師会会長  
細 谷 仁 憲

東北大学大学院歯学研究科 研究科長 佐々木 啓 一

3. 祝 辞 日本歯科医師会 副 会 長 佐 藤 保

4. 来賓紹介 宮城県歯科医師会 専務理事 枝 松 淳 二

5. 第 69 回大会表彰 山 形 県 歯 科 医 師 会 富 田 滋

奥羽大学歯学部口腔衛生学講座

鶴 岡 地 区 歯 科 医 師 会

青 森 県 歯 科 医 師 会 石 川 佳 和

岩手医科大学病理学講座病態解析学分野

奥 州 歯 科 医 師 会

東北大学病院顎顔面口腔再建治療部

6. 閉 会 宮城県歯科医師会 副 会 長 泉 谷 信 博

## 特別講演抄録



### iPS細胞が描く歯科医療の未来 ～これからの再生歯科医療への期待と課題～

江 草 宏

東北大学大学院歯学研究科  
分子・再生歯科補綴学分野 教授

Brånemark 博士がオッセオインテグレーションを発見したのは20世紀半ばのことです。以来、口腔インプラント治療が普遍的な治療となるのに約50年もの年月を要しました。実験室で発見される革新的な技術が患者に恩恵をもたらすまでの時間軸とはこんなものなのかもしれません。

日本発の革新的な科学技術である“iPS細胞”は、発見から10年が経つ現在も国民の期待を集め、その医療への応用は国策として推進されています。山中伸弥教授のノーベル賞受賞もあり、メディアでも何かと話題となるこのiPS細胞。私たち歯科医療従事者にとって身近なものとなり得るのでしょうか？

歯科は1980年代には既にGTR法やGBR法等の歯周組織再生療法を確立しており、先駆的に再生医療に取り組んでいる分野の一つです。生きた細胞を利用して失った組織を作り出そうとする“ティッシュ・エンジニアリング”の概念が科学界に提唱されたのは、その後1993年のことです。近年の口腔インプラント治療は、この概念を積極的に取り入れながら「インプラント・再生治療」としてさらに発展を遂げ、その適応はこれまで困難であった症例にも拡大しつつあります。米国インプラント学会 (Academy of Osseointegration) は2010年のコンセンサス会議で、「近い将来、ティッシュ・エンジニアリングあるいは幹細胞技術はインプラント治療に確かな恩恵を与えるであろう」と報告しました (Int J Oral Maxillofac Implants. 2011)。それから約5年経った現在、この予想は生命科学の急速な進展に後押しされながら的中しつつあります。さて、次の10年間、科学技術の進歩は歯科をどのように変えていくのでしょうか？

本講演では、再生歯科医療の現状と最先端をお伝えすると共に、iPS細胞に期待されている近未来の歯科医療技術について、夢のあるお話をしてみたいと思います。



  
**略歴****江 草 宏**

東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野 教授

---

1972年、広島生まれ。

98年に広島大学歯学部卒業後、99年香港大学歯学部口腔生物学講座研究助手となる。

02年に広島大学大学院で歯学博士を取得後、日本学術振興会特別研究員として米国 UCLA ワイントロープ研究所に勤務。

04年に大阪大学歯科補綴学第一教室助手、07年に同助教。14年から現職。

日本補綴歯科学会専門医・指導医、日本再生医療学会認定医。

主な受賞は、02年に国際歯科研究学会 (IADR) エドワード・ハットン賞第一位、04年に IADR アーサー・フレッチェ最優秀若手歯科補綴学研究者賞、11年に大阪大学功績賞、12年に IADR 最優秀若手科学者賞、13年に大阪大学総長奨励賞など。

---

# 学会運営上のご連絡

## ◆会員の皆様へ

- (1) 学会プログラムは当日ご持参下さい。
- (2) 日歯生涯研修事業ICカードを当日ご持参下さい。
- (3) 会場入場の際はネームカードを着用して下さい。ネームカードは受付に準備いたします。
- (4) 質問者は質問用マイクで所属と氏名を述べてからご発言下さい。

## ◆口演者の皆様へ

- (1) 口演時間8分、質疑応答時間2分を厳守して下さい。終了2分前（口演開始後8分）にチャイムを1回、終了時（質疑応答を含めた終了時刻）にチャイム2回を鳴らしてお知らせします。
- (2) 次演者は口演開始10分前までに次演者席に着席して下さい。
- (3) 「みちのく歯學會雑誌」に掲載する発表者論文（査読付き論文）は、11月11日（金）までに所属県歯科医師会へご提出下さい。  
提出の方法は、「みちのく歯學會雑誌投稿規定」をご一読の上、発表者論文をCD-RとA4にプリントアウトして一緒に提出して下さい。  
事後抄録（査読なし・会員投稿欄）の場合は、口演当日に受付へ提出して下さい。

## ◆座長の皆様へ

- (1) 発表進行は座長にご一任しますので、時間厳守でよろしくお願いいたします。
- (2) ご担当時刻の10分前までに次座長席にご着席下さい。

## ◆学会係員は、胸に表示を付けておりますので、ご不明の点は申し出て下さい。

# 第1日 11月5日(土)

## 一般口演

I 群 (16:05~17:05)

座長：福島県歯科医師会 常務理事 石川伸一

### ① 奥羽大学歯学部附属病院における鑄造物の誤飲・誤嚥事故防止対策

○佐々木 重夫 保田 穰 杉田 俊博

奥羽大学歯学部附属病院 地域医療支援歯科

### ② 新規化学 – 機械的齶蝕除去剤の開発

○山田 嘉重 木村 裕一 菊井 徹哉

奥羽大学歯学部歯科保存学講座

### ③ 歯肉溝滲出液 miRNA による新しい歯周炎診断法

齋藤 朗<sup>1,2)</sup> 堀江 真史<sup>1,2,3)</sup> 江尻 健一郎<sup>4)</sup> 青木 章<sup>4)</sup>  
鈴木 伸太<sup>4)</sup> 前川 省吾<sup>4)</sup> 片桐 さやか<sup>4)</sup>  
Sophannary Kong<sup>4)</sup> 山内 恒人<sup>5)</sup> 山口 洋子<sup>6)</sup>  
和泉 雄一<sup>4)</sup> ○大島 光宏<sup>7)</sup>

東京大学大学院医学系研究科呼吸器内科学<sup>1)</sup> 東京大学保健・健康推進本部<sup>2)</sup>  
理化学研究所ライフサイエンス技術基盤センター<sup>3)</sup> 東京医科歯科大学歯周病学分野<sup>4)</sup>  
慶應義塾大学工学部数学科<sup>5)</sup> 日本大学歯学部生化学講座<sup>6)</sup> 奥羽大学薬学部生化学分野<sup>7)</sup>

### ④ 最近経験した顎補綴の2症例

○加藤 正人<sup>1)</sup> 小田島 正博<sup>2)</sup>

宮城県歯科医師会会員

まさと歯科医院<sup>1)</sup> (医) 社団飛翔会 小田島歯科医院<sup>2)</sup>

### ⑤ スポーツ少年団児童の外傷性歯牙脱臼によるセメント質剥離が疑われる症例

○齋藤 裕太

山形県歯科医師会会員

## ⑥ 岩手県における歯科衛生士実態調査について

○久保宮幸 児玉厚三 鈴木卓哉 遠藤義樹  
藤本淳 根反不二生 南幅眞治 一戸晃  
青木修治 大黒英貴 前川秀憲 小田中健策  
佐藤保

一般社団法人 岩手県歯科医師会 学術医療管理委員会

## Ⅱ 群 (17:10~18:00)

座長：宮城県歯科医師会 常務理事 岡部太一

## ⑦ 盛岡市歯科医師会と盛岡市保健所による幼児歯科健康診査活動の評価

○黒田直寿<sup>1)</sup> 照井純<sup>1)</sup> 松浦政彦<sup>1)</sup> 田村栄樹<sup>1)</sup>  
佐藤潤<sup>1)</sup> 佐藤寿久<sup>1)</sup> 前川秀憲<sup>1)</sup> 小笠原信子<sup>2)</sup>  
高橋清実<sup>2)</sup>

一般社団法人 盛岡市歯科医師会<sup>1)</sup> 盛岡市保健所<sup>2)</sup>

## ⑧ 宮城県児童生徒の歯・口の健康実態について

—平成27年度 宮城県児童生徒の健康実態調査より—

山形光孝 浅沼勝 阿部清一郎 ○石川和史  
佐藤晶 細谷仁憲 小関健由

一般社団法人 宮城県歯科医師会 学校歯科部会

## ⑨ 大崎歯科医師会の大崎市保健行政への関わりについて

○前原雄二 千葉昌一 野田清一 三澤知裕  
鹿郷峰敏 戸田慎治

一般社団法人 大崎歯科医師会

## ⑩ 仙台市における歯科医療機関に対する保健所立入検査の実態について —第2報—

○澤野和則<sup>1)</sup> 入野田昌史<sup>2)</sup> 高橋健一<sup>1)</sup> 矢尾板由紀子<sup>1)</sup>  
清野浩昭<sup>1)</sup> 佐藤英明<sup>1)</sup> 今野賢克<sup>1)</sup> 三浦啓伸<sup>1)</sup>  
駒形守俊<sup>1)</sup>

一般社団法人 仙台歯科医師会<sup>1)</sup> 入野田歯科医院<sup>2)</sup>

## ⑪ 山形県内における歯科技工士の現状に関するアンケート調査 第二報

○大 類 晋<sup>1)</sup> 鈴木 基<sup>1)</sup> 富樫 正樹<sup>1)</sup> 高橋 晃治<sup>1)</sup>  
大 峽 潤<sup>1)</sup> 齋藤 裕太<sup>1)</sup> 黒江 敏史<sup>1)</sup> 齋藤 博夫<sup>2)</sup>

山形県歯科医師会 学術常任委員会<sup>1)</sup> 山形県歯科技工士会<sup>2)</sup>

---

**懇親会 (18:30) 江陽グランドホテル**

### 懇親会

11月5日(土) 第1日目終了後、午後6時30分より懇親会を開催いたします。  
多数の皆様のご参加をお待ちしております。

会 場：江陽グランドホテル (学会会場より徒歩約8分)

仙台市青葉区本町2丁目3番1号 TEL 022 - 267 - 5111



○佐々木 重 夫   保 田   穰   杉 田 俊 博

奥羽大学歯学部附属病院 地域医療支援歯科

.....

**【はじめに】** 歯科領域における医療事故での死亡事例は医科領域に比較して少ないと思われるが、誤飲・誤嚥事故は死亡事故を惹起する可能性がある。奥羽大学歯学部附属病院では鑄造物合着時の誤飲事故が散見されたため特別な防止策を行うことにした。

**【方法】** 奥羽大学歯学部附属病院では毎週、医療安全カンファレンスを開催し、提出されたヒヤリ・ハット、インシデント・アクシデント報告書から原因の分析と対策を検討し、医療事故を未然に防止するようにしている。平成26年7月から平成27年7月の1年間に4件の鑄造物合着時の誤飲報告がなされた。

**【結果】** 平成27年9月より考えうる全ての鑄造物に技工操作の段階で誤飲・誤嚥事故防止のためのループを付与することを義務付け、鑄造物試適時まではデンタルフロスを併用することで合着時の誤飲事故はなくなった。

**【考察】** 鑄造物へのループ付与は誤飲・誤嚥事故防止に有益であると考えられた。

● MEMO ●

---

## 2 新規化学 — 機械的齲蝕除去剤の開発

○山田嘉重 木村裕一 菊井徹哉

奥羽大学歯学部歯科保存学講座

.....

**【はじめに】** 通常の臨床では回転切削器具を用いて齲蝕除去を行うが、切削熱、圧などによる痛みの出現や歯髄炎の併発などが発生する危険性が指摘されており、新たな齲蝕除去法の検討が必要である。化学—機械的齲蝕除去法もその解決法の一つである。

**【実験方法】** 生体に安全な齲蝕除去剤として、パイナップルの酵素、オレンジオイルの成分およびクエン酸を含有した新規化学—機械的齲蝕除去剤を試作した。抜去歯を用いて、齲蝕除去後の窩洞面を観察後に修復処置への影響を調べ、本試薬の効果を検討した。

**【結果】** 新規化学—機械的齲蝕除去剤使用後の窩洞表面には亀裂や破折など特記すべき問題所見は見られず、またスミヤ層の除去効果も有していた。さらにコンポジットレジン修復への影響も認められなかった。

**【考察】** 試作新規化学—機械的齲蝕除去剤は、齲蝕除去およびその後の修復処置に対して問題がなく、将来の臨床応用が期待できる。

● MEMO ●

---



### 3 歯肉溝滲出液 miRNA による新しい歯周炎診断法

齋藤 朗<sup>1,2)</sup> 堀江 真史<sup>1,2,3)</sup> 江尻 健一郎<sup>4)</sup> 青木 章<sup>4)</sup>  
鈴木 伸太<sup>4)</sup> 前川 省吾<sup>4)</sup> 片桐 さやか<sup>4)</sup>  
Sophannary Kong<sup>4)</sup> 山内 恒人<sup>5)</sup> 山口 洋子<sup>6)</sup>  
和泉 雄一<sup>4)</sup> ○大島 光宏<sup>7)</sup>

東京大学大学院医学系研究科呼吸器内科学<sup>1)</sup> 東京大学保健・健康推進本部<sup>2)</sup>  
理化学研究所ライフサイエンス技術基盤センター<sup>3)</sup> 東京医科歯科大学歯周病学分野<sup>4)</sup>  
慶應義塾大学工学部数学科<sup>5)</sup> 日本大学歯学部生化学講座<sup>6)</sup> 奥羽大学薬学部生化学分野<sup>7)</sup>

.....

**【はじめに】** 各種疾患において、体液中の miRNA は診断用マーカーとしての有用性が示唆されているが、歯肉溝滲出液 (GCF) 中に miRNA が存在するかどうかは知られていなかった。

**【材料および方法】** アレイにより、歯周炎および健常ボランティア GCF 中の miRNA 発現プロファイルを網羅的に調べた。差が見られた 40 種を選定し、歯周炎診断用カスタムパネルを作製後、別の被検者に由来する GCF で発現パターンを検討した。

**【結果と考察】** 歯周炎と健常ボランティアとの間で、miRNA 発現パターンに顕著な差があることを確認した。以上より、GCF miRNA の検出は、歯周炎の正確な診断、早期検出や予後予測にとって有益な方法となるであろう。

**【謝辞】** 本研究は、ふくしま医療福祉機器開発事業費補助金「歯周炎診断システムの研究開発・事業化」(代表：株式会社アイシーエレクトロニクス)、JSPS 科研費 JP26461185、JP16K18437、JP16K11825、JP26463128、JP16K11843、JP25293424、JP15K15768 の支援により行われた。

● MEMO ●

---

## 4 最近経験した顎補綴の2症例

○加藤 正人<sup>1)</sup> 小田島 正博<sup>2)</sup>

宮城県歯科医師会会員

まさと歯科医院<sup>1)</sup> (医) 社団飛翔会 小田島歯科医院<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】** 軟口蓋に及ぶ口蓋裂と、歯肉癌による下顎骨切除で生じた顎欠損に補綴処置を行った2症例について報告する。

**【症例】** [症例1：88歳女性] 唇顎口蓋裂。旧義歯は数年前に製作。平成27年2月義歯不適合で当医院に来院。

[症例2：67歳男性] 下顎左側大白歯部の歯肉癌により平成26年4月東北大学病院にて下顎骨区域切除術等施行。その後局部床義歯を製作したが27年11月義歯不適合となった。

**【治療経過および考察】** 症例1は辺縁封鎖を行うため欠損を全て床で覆い、口蓋の欠損部は印象を可能な範囲まで採得し閉鎖型とすることによって維持安定が図れたと考えられる。

症例2は欠損部粘膜と残存歯の被圧縮度の違いが大きく、大連結子を緩圧型にすることで咬合圧を分散できたと推察された。

● MEMO ●

---

## 5 スポーツ少年団児童の外傷性歯牙脱臼によるセメント質剥離が疑われる症例

○齋藤 裕太

山形県歯科医師会会員

.....

**【はじめに】** 小学低学年児童に起こった口腔外傷治療を経験したので報告する。

**【症例】** 患者：14歳女性。現症：バスケットボール練習中にひじが上顎前歯にぶつかり、左上1番については上下に歯が動く亜脱臼。周囲歯肉より出血、上口唇は腫脹していた。

**【治療経過】** 診断の結果、動揺歯をwireにて固定した。Wire除去後動揺のあった左上1番については動揺が改善したので経過観察とした。

3年後、左上1番唇側歯肉腫脹にて来院。EPT(+)経過観察とした。さらに3ヵ月後、唇側歯肉に瘻孔形成、腫脹を認めたもののEPT(+)であった。CT撮影をしたところ歯根外部吸収の疑いを認めたので外科処置を実施し、経過は良好現在に至る。

**【考察】** 小学低学年でのスポーツ時における口腔外傷はマウスガード装着開始時期の問題も含め判断がとても難しい。また、治療ではCT画像の有用性を感じた。歯の外傷予防のためにも低年齢からの積極的なマウスガード装着普及に尽力したい。

● MEMO ●

---

## 6 岩手県における歯科衛生士実態調査について

○久保宮幸 児玉厚三 鈴木卓哉 遠藤義樹  
藤本淳 根反不二生 南幅眞治 一戸晃  
青木修治 大黒英貴 前川秀憲 小田中健策  
佐藤保

一般社団法人 岩手県歯科医師会 学術医療管理委員会

.....

**【はじめに】** 岩手県歯科医師会による会員アンケート（平成21年実施）では、約半数に歯科衛生士が不足している状況であり、全国的にも未就業歯科衛生士の復職支援が検討されている。

**【方法】** 平成27年に岩手県からの助成を受け、岩手県歯科衛生士会、岩手県立衛生学院歯科衛生士学科や岩手医科大学医療専門学校歯科衛生士学科の同窓会ならびに岩手医科大学附属病院歯科医療センターの協力を得て、歯科衛生士復職支援事業の一環としてアンケートによる歯科衛生士実態調査を行なった。

**【結果】** アンケート発送数1,000名中502名から回答を得た。離職中の歯科衛生士のうち「すぐにでも再就職したい」「条件が合えば再就職したい」との回答が60%を超え、復職支援のための研修会の開催に至っている。

**【考察】** 今後も、未就業の歯科衛生士が抱える問題や復職に当たっての要望を把握し、再就職しやすい環境づくりに務めることが必要と思われる。

● MEMO ●

---

## 盛岡市歯科医師会と盛岡市保健所による幼児歯科健康 診査活動の評価

○黒田直寿<sup>1)</sup> 照井 純<sup>1)</sup> 松浦政彦<sup>1)</sup> 田村栄樹<sup>1)</sup>  
佐藤 潤<sup>1)</sup> 佐藤寿久<sup>1)</sup> 前川秀憲<sup>1)</sup> 小笠原信子<sup>2)</sup>  
高橋清実<sup>2)</sup>

一般社団法人 盛岡市歯科医師会<sup>1)</sup> 盛岡市保健所<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】** 盛岡市歯科医師会は、盛岡市保健所の協力のもとで幼児歯科健康診査をS36年度より実施してきた。H6年度より1歳児に始まり、H7年度に5歳児、H8年度に2歳児とH19年度には4歳児と拡大し、就学期までの通年に亘る幼児歯科健康診査を行ってきた。その活動をH17年から10年間で検討した。

**【方法】** 例年行ってきた歯科健康診査集計を用い、問診項目の項目別集計から過去10年間を比較した。

**【結果】** う蝕有病者率は、1歳児、1歳6か月児で、増減しながらも減少傾向が認められた。2歳児、3歳児、4歳児と5歳児は、ほぼ減少傾向が認められた。一人平均う歯本数は、2歳児、3歳児、4歳児と5歳児で、ほぼ減少傾向が認められた。

**【結論】** 1歳児から就学期までの通年に亘る幼児歯科健康診査の重要性を認めた。

● MEMO ●

---

## 8

## 宮城県児童生徒の歯・口の健康実態について — 平成27年度 宮城県児童生徒の健康実態調査より —

山形光孝 浅沼 勝 阿部清一郎 ○石川和史  
佐藤 晶 細谷仁憲 小関健由

一般社団法人 宮城県歯科医師会 学校歯科部会

.....

**【はじめに】** 宮城県では、県教育委員会により、3年毎に「宮城県児童生徒の健康実態調査」が行なわれている。今回は平成27年度の歯科・口腔領域の状況を経年的な推移をふまえ報告したい。

**【方法】** 歯科・口腔領域については調査開始当初より宮城県歯科医師会学校歯科部会が中心となり分析を行なってきた。検診診査結果を10項目にまとめ評価する。

**【考察】** 児童生徒のむし歯患率は、経年的に減少がみられ、地域による格差も解消傾向にある。しかし、歯垢の付着状況・歯肉炎・歯周病のり患率は経年的変化は少なく横ばい状態である。

● MEMO ●

---

## 9 大崎歯科医師会の大崎市保健行政への関わりについて

○前原雄二 千葉昌一 野田清一 三澤知裕  
鹿郷峰敏 戸田慎治

一般社団法人大崎歯科医師会

大崎市は、宮城県の北西部に位置し、平成の大合併で旧1市6町により誕生した農業を中心とした人口約13万の市です。

その大崎市では、3歳児のむし歯は年々減少しているものの全国でもワーストの宮城県の平均より多く、成人においては、健康寿命・脳血管疾患・喫煙や運動などの健康指数のいずれもがメタボ6年連続全国ワースト2の県平均以下となっています。

大崎歯科医師会は、歯科がこの負のスパイラルから脱するきっかけになればと考え、それぞれのライフステージを担う行政の4部署（健康推進課・子育て支援課・教育委員会・高齢介護課）と平成24年に生涯歯科保健推進会議を立ち上げ、5回の会議を行いました。

その結果、① 4部署で健康指数情報の共有化 ② 保育所で学校歯科健診表の採用 ③ 市立保育所でのフッ化物洗口（宮城県のフッ化物洗口モデル事業を含む） ④ 小・中学校における歯肉炎対策事業などの成果を得ています。

● MEMO ●

## 10

## 仙台市における歯科医療機関に対する保健所立入検査の実態について — 第2報 —

○澤野和則<sup>1)</sup> 入野田昌史<sup>2)</sup> 高橋健一<sup>1)</sup> 矢尾板由紀子<sup>1)</sup>  
清野浩昭<sup>1)</sup> 佐藤英明<sup>1)</sup> 今野賢克<sup>1)</sup> 三浦啓伸<sup>1)</sup>  
駒形守俊<sup>1)</sup>

一般社団法人 仙台歯科医師会<sup>1)</sup> 入野田歯科医院<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】** 宮城県仙台市における歯科診療所に対する保健所の立入検査について仙台歯科医師会会員にアンケートを実施したので、その第2報を報告する。

**【方法】** 平成25年3月2日(土) 仙台歯科医師会主催の救急医療セミナーに出席した仙台歯科医師会会員約84名にアンケート用紙を配布し、当日回収した。

**【結果】** 宮城県仙台市における保健所立入検査は、約1カ月前に保健所から通知が届き、保健所からは、1名ないし2名の所員が約1時間程度の時間をかけて、検査、指導を行っている。

**【考察】** 「安全管理マニュアル」の整備、医療廃棄物の管理・処理、診療業務における消毒・滅菌等の徹底による感染症対策、レントゲン室外の放射線漏洩検査など多岐にわたり確認をされ、指導・改善を求められると考察される。

● MEMO ●

---



## 11 山形県内における歯科技工士の現状に関する アンケート調査 第二報

○大類 晋<sup>1)</sup> 鈴木 基<sup>1)</sup> 富樫 正樹<sup>1)</sup> 高橋 晃治<sup>1)</sup>  
大峽 潤<sup>1)</sup> 齋藤 裕太<sup>1)</sup> 黒江 敏史<sup>1)</sup> 齋藤 博夫<sup>2)</sup>  
山形県歯科医師会 学術常任委員会<sup>1)</sup> 山形県歯科技工士会<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】** 良質な歯科医療を提供するためには歯科医師、歯科衛生士、そして歯科技工士が専門的知識と技術を発揮できるチームアプローチを実践する必要がある。最近、歯科技工士が全国的に減少傾向にあることから、歯科医療への影響を鑑みて、山形県歯科医師会学術常任委員会では昨年、県内の会員歯科医師へ歯科技工に関するアンケート調査を行い、第68回東北地区歯科医学会でその結果を発表した。今回は県内で勤務、開業している歯科技工士にアンケート調査を行ったので、その結果について発表する。

**【方法】** 歯科医院勤務歯科技工士、歯科技工所開設者、勤務者に対して雇用環境、歯科医院との連携状況などについて調べた。

**【結果および考察】** 昨年の調査結果ともあわせて考察し、今後の歯科技工士の労働環境改善、歯科医師との良好な連携を探るための一助としたい。

● MEMO ●

---



## 第2日 11月6日(日)

### 一般口演

Ⅲ 群 (9:00~10:10)

座長：青森県歯科医師会 理事 伊藤 真

#### 12 液状化検体細胞診を用いた公務員歯科健診での“口腔がん早期発見”の試み

○横堀 育子<sup>1)</sup> 佐々木 優<sup>2,3)</sup>

地方職員共済組合宮城県支部歯科診療所<sup>1)</sup> 医療法人 優和会 おひさまにここ歯科医院<sup>2)</sup>  
東北大学大学院医学系研究科 病理病態学講座 病理診断学分野<sup>3)</sup>

#### 13 歯科医と小児科医がともに取り組む小学生の禁煙教育プログラム —小学生からの口腔がん啓蒙活動として

○佐々木 優<sup>1,2)</sup>

医療法人 優和会 おひさまにここ歯科医院<sup>1)</sup> 宮城県利府町立菅谷台小学校 歯科校医<sup>2)</sup>

#### 14 福島県における口腔がん患者の推移

○早乙女 大地 菅野 勝也 高田 訓 瀬川 洋  
長谷川 博 内藤 博之 宮島 久 小坂橋 勉

奥羽大学歯学部口腔外科学講座口腔外科学

#### 15 当科における細胞診の臨床的検討および有用性について

○浅倉 彬人 御代田 駿 菅野 勝也 川原 一郎  
浜田 智弘 金 秀 樹 高田 訓

奥羽大学歯学部口腔外科学講座口腔外科学分野

#### 16 姿勢が下顎位に及ぼす影響

○石川 佳和

青森県歯科医師会会員 医療法人 愛和会 桜川歯科医院

#### 17 米沢方式を活用した児童・生徒のCO・GOの実態調査

○山田 雄大<sup>1)</sup> 安藤 栄吾<sup>1)</sup> 松岡 勲<sup>1)</sup> 大峽 潤<sup>1)</sup>  
村山 敏明<sup>1)</sup> 平間 和広<sup>1)</sup> 渡部 宏一<sup>1)</sup> 鈴木 基<sup>1)</sup>  
林 隆一<sup>1)</sup> 結城 昌子<sup>2)</sup> 廣瀬 公治<sup>2)</sup>

米沢市歯科医師会<sup>1)</sup> 奥羽大学歯学部口腔衛生学講座<sup>2)</sup>

## 18 8020 推進、達成を考える（第6報）

- 吉川 哲也（青森市開業） 櫻井 省一（青森市開業）  
梅村 英之（弘前市開業） 渡辺 康一（弘前市開業）  
新井田 進一（八戸市開業） 谷地 忍（八戸市開業）  
青森県歯科医師会会員

## IV 群（10:15～11:15）

座長：岩手県歯科医師会 常務理事 児玉 厚三

## 19 ヒト歯を用いた被ばく線量評価事業 — 福島県歯科医師会での取り組み —

- 池山 丈二<sup>1)</sup> 海野 仁<sup>1)</sup> 金子 振<sup>1)</sup> 小坂 健<sup>2)</sup>  
篠田 壽<sup>2)</sup> 佐々木 啓一<sup>2)</sup> 廣瀬 公治<sup>3)</sup> 大野 敬<sup>3)</sup>  
福島県歯科医師会<sup>1)</sup> 東北大学大学院歯学研究科<sup>2)</sup> 奥羽大学歯学部<sup>3)</sup>

## 20 ヒト歯を用いた被ばく線量評価事業 — 原発事故前に形成された乳歯の検討 —

- 高橋 温<sup>1)</sup> 清水 良央<sup>1)</sup> 千葉 美麗<sup>1)</sup> 鈴木 敏彦<sup>1)</sup>  
小荒井 一真<sup>2)</sup> 岡 壽崇<sup>2)</sup> 西山 純平<sup>2)</sup> 木野 康志<sup>2)</sup>  
小坂 健<sup>1)</sup> 篠田 壽<sup>1)</sup> 佐々木 啓一<sup>1)</sup>  
東北大学大学院歯学研究科<sup>1)</sup> 東北大学大学院理学研究科<sup>2)</sup>

## 21 東北大学病院における摂食嚥下治療センターの取り組みと 摂食・嚥下障害の実態調査

- 石河 理紗<sup>1)</sup> 小山 重人<sup>1)</sup> 佐藤 奈央子<sup>1)</sup> 細川 亮一<sup>2)</sup>  
松井 裕之<sup>3)</sup> 松舘 芳樹<sup>1)</sup> 加藤 健吾<sup>4)</sup> 香取 幸夫<sup>4)</sup>  
小関 健由<sup>2)</sup> 佐々木 啓一<sup>3)</sup>  
東北大学病院・顎口腔再建治療部<sup>1)</sup> 東北大学大学院 歯学研究科・予防歯科学分野<sup>2)</sup>  
東北大学大学院 歯学研究科・口腔システム補綴学分野<sup>3)</sup>  
東北大学大学院 医学研究科・耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野<sup>4)</sup>

## 22 帰宅困難地域の仮設住居入居者に対する口腔ケア推進事業

- 瀬川 洋<sup>1)</sup> 大橋 明石<sup>1)</sup> 板橋 仁<sup>2)</sup> 高田 訓<sup>3)</sup>  
池山 丈二<sup>4)</sup> 金子 振<sup>4)</sup>  
奥羽大学歯学部口腔衛生学講座<sup>1)</sup> 奥羽大学歯学部成長発育歯学講座歯科矯正学分野<sup>2)</sup>  
奥羽大学歯学部口腔外科学講座<sup>3)</sup> 福島県歯科医師会<sup>4)</sup>

## 23 県立中部病院緩和ケア病棟における医科歯科連携の取り組み

- 高橋 綾<sup>1)</sup> 前川 洋<sup>1)</sup> 齋藤 英朗<sup>1)</sup> 中村 ますみ<sup>1)</sup>  
遠藤 忠治<sup>1)</sup> 千葉 寛子<sup>1)</sup> 米持 武美<sup>1)</sup> 及川 陽次<sup>1)</sup>  
宮澤 裕一郎<sup>1)</sup> 佐藤 保<sup>1)</sup> 高橋 良明<sup>2)</sup> 畠山 良彦<sup>3)</sup>  
星野 彰<sup>4)</sup> 遠藤 秀彦<sup>4)</sup>

岩手県歯科医師会 口腔保健センター事業運営委員会<sup>1)</sup> 北上歯科医師会<sup>2)</sup>  
花巻市歯科医師会<sup>3)</sup> 岩手県立中部病院<sup>4)</sup>

## 24 一般開業歯科医院である当院におけるがん患者への歯科的対応 — 周術期から終末期まで48例の検討 —

- 菅野 真人<sup>1,2)</sup> 松岡 幸子<sup>1)</sup> 大沼 可名美<sup>1)</sup> 蓬田 諒子<sup>1)</sup>  
太田 マキ<sup>1)</sup> 菅野 由香里<sup>1)</sup>

太田歯科医院<sup>1)</sup> 宮城県歯科医師会会員<sup>2)</sup>

## V 群 (11:20~12:20)

座長：山形県歯科医師会 常務理事 鈴木 基

## 25 米沢市歯科医師会の医療連携の取り組み

- 安藤 栄吾 平 幸雄 山崎 宙 松岡 勲  
大峽 潤 満田 隆之 渡部 宏一 村山 敏明  
遠藤 浩 鈴木 基 平間 和広 五十嵐 栄  
林 隆一

一般社団法人 米沢市歯科医師会

## 26 要介護5から通院になった在宅患者

- 五十嵐 雄一

山形県歯科医師会会員

## 27 山形大学医学部附属病院における周術期口腔管理の現状と課題

- 山森 郁 井場 明日香 遊 佐和之 北畠 健一郎  
飯野 光喜

山形大学医学部 歯科口腔・形成外科学講座

28 秋田県湯沢雄勝地区における在宅歯科診療の普及状況  
— 2009年、2013年、2016年の比較 —

秋野博尚	秋野一尚	姉崎研哉	大友義信
大友佳壽	大山賢二郎	小原妥子	勝部朝之
木村貞昭	小菅一弘	小番孝司	小番健司
佐藤達児	佐藤達	佐藤達志	佐野治義
柴田貞彦	志水透	荘司薫	瀬川雅己
高橋章子	高橋克彦	高橋寿	高橋亮
田尻聡	長澤大	新山重美	芳賀久志
三澤健士	守口修	○山中恒明	山本弘助

秋田県 湯沢市雄勝郡歯科医師会

29 岩手県歯科医師会におけるがん診療医科歯科連携の取り組み（第3報）

○齊藤英朗	前川洋	中村ますみ	遠藤忠治
千葉寛子	及川陽次	米持武美	高橋綾
宮澤裕一郎	前川秀憲	佐藤保	

岩手県歯科医師会 □腔保健センター事業運営委員会

30 当科における内視鏡下手術についての臨床的検討

○北畠健一朗	石川恵生	遊佐和之	山森郁
飯野光喜			

山形大学医学部 歯科口腔形成外科学講座

VI 群 (12:25~13:25)

座長：秋田県歯科医師会 理事 小川欽也

31 インプラント周囲に発生した顎骨中心性癌の1例

○桑島精一	中田憲	石田昂	福地峰世
小澤諒	五十嵐秀光	今野泰典	山崎雅人
高野裕史	福田雅幸		

秋田大学医学部附属病院

### 32 口腔癌の予後予測因子についての検討

○山崎 雅人 中田 憲 石田 昂 福地 峰世  
小澤 諒 五十嵐 秀光 今野 泰典 桑島 精一  
高野 裕史 福田 雅幸

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科

### 33 山形大学医学部附属病院歯科口腔・形成外科における過去14年間の顎矯正手術の臨床統計的検討

○助川 香織<sup>1)</sup> 小林 武仁<sup>1)</sup> 櫻井 博理<sup>2)</sup> 尾崎 尚<sup>3)</sup>  
濱本 宜興<sup>3)</sup> 遊佐 和之<sup>4)</sup> 橘 寛彦<sup>4)</sup> 飯野 光喜<sup>4)</sup>

公立置賜総合病院 歯科口腔外科<sup>1)</sup> 日本海総合病院 歯科口腔外科<sup>2)</sup>

山形県立中央病院 歯科口腔外科<sup>3)</sup> 山形大学医学部附属病院 歯科口腔・形成外科<sup>4)</sup>

### 34 舌正中に生じた上皮内癌の一例

○五十嵐 弘樹 本間 英明 山崎 森里生 金子 哲治  
工藤 聖美 佐久間 知子 菅野 寿 長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

### 35 下顎骨粉碎骨折を伴った多発外傷の1例

○本間 英明 五十嵐 弘樹 山崎 森里生 金子 哲治  
工藤 聖美 佐久間 知子 菅野 寿 長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

### 36 半夏瀉心湯は頭頸部化学放射線治療由来の口腔粘膜炎を抑制する

○玉原 亨 細川 亮一 丹田 奈緒子 佐久間 陽子  
飯島 若菜 猪狩 真奈 百々 美奈 加藤 翼  
渡辺 俊吾 伊藤 恵美 高橋 久美子 小関 健由

東北大学病院 予防歯科

閉会 (13:30)





## 液状化検体細胞診を用いた公務員歯科健診での “口腔がん早期発見”の試み

○横堀育子<sup>1)</sup> 佐々木 優<sup>2,3)</sup>

地方職員共済組合宮城県支部歯科診療所<sup>1)</sup> 医療法人 優和会 おひさまにこここ歯科医院<sup>2)</sup>  
東北大学大学院医学系研究科 病理病態学講座 病理診断学分野<sup>3)</sup>

.....

**【はじめに】** 口腔がんは発見が遅れると死亡率が高まるとともに咀嚼・発語など重要機能が失われる。職員を口腔がんから守ることは事業所歯科の大きな役割の一つである。

**【概要】** 2015年度より定期健康診断時に視診による口腔がん一次スクリーニングと液状化検体細胞診による二次スクリーニングを行った。

**【結果】** 対象は宮城県職員6,099名のうち希望者765名。視診により粘膜病変を認めたのは53例、二次スクリーニングで液状化検体細胞診を施行したのは2例。検査は宮城県医師会健康センターに依頼した。症例：30歳代女性。臨床診断：白板症。検診時、舌右側縁部に白色病変を認めたが、指摘時まで気づかず。細胞診断：クラスⅡb（経過観察を要する白板症）

**【考察】** 口腔がんは初期では自覚症状がないことも多く、あっても専門医を受診するのが遅れる傾向にある。事業所歯科健診で無症状の口腔がんおよび前がん病変を発見し、細胞診を行うことの意義は大きいと思われた。

● MEMO ●

---

## 13 歯科医と小児科医がともに取り組む小学生の禁煙教育プログラム — 小学生からの口腔がん啓蒙活動として

○佐々木 優<sup>1,2)</sup>

医療法人 優和会 おひさまにこここ歯科医院<sup>1)</sup> 宮城県利府町立菅谷台小学校 歯科校医<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】**厚労省のがん対策推進基本計画が目標未達の一因として、喫煙率が下がらなかったことが挙げられている。

**【方法】**宮城県菅谷台小学校では3年前より小児科管理校医と歯科校医が協力して禁煙教育を行い、効果を上げている。プログラムは6年生を対象に、歯科医からは喫煙が口腔がんや歯周病のリスクファクターであることを口腔内写真で学んだ。小児科医からは喫煙が全身のがんや循環器疾患など多くの疾病のリスクを上げることと友人らからタバコをすすめられた時の断り方をロールプレイングゲーム方式で学んだ。

**【結果】**事後感想は、たばこの恐ろしさがよくわかった、一生たばこを吸わないと思う、すすめられた時の断り方が分かったなどだった。

**【考察】**小林博北大名誉教授らは、スリランカで子供たちからはじまる禁煙教育を展開、口腔がん予防に大きな効果を上げた。本邦でも低年齢からの禁煙教育が必要で、歯科医と小児科医の協力が有効であると考えられた。

● MEMO ●

---

## 14 福島県における口腔がん患者の推移

○早乙女 大地 菅野 勝也 高田 訓 瀬川 洋  
長谷川 博 内藤 博之 宮島 久 小坂橋 勉

奥羽大学歯学部口腔外科学講座口腔外科学

.....

**【はじめに】** 日本の口腔がん患者数は増加傾向にある。癌治療はもとより早期発見・早期治療が望まれており、それは口腔がんにおいても同様である。福島県は県北、県南、会津、浜通りの4方部に分かれており、県北には福島県立医科大学附属病院、県南には寿泉堂総合病院および奥羽大学歯学部附属病院、会津には会津中央病院、浜通りにはいわき市立総合磐城共立病院がある。これら5つの施設は、各方部においてそれぞれが口腔がん治療の中心的な役割を担っている。

**【方法】** 今回我々は、前述した福島県内各方部の病院を受診した口腔がん患者を対象に、各施設における患者数、年齢、性別、病期期間、原発部位、TNM分類、病理診断、初回治療効果判定、治療後の転機について実態調査を行った。これらをもとに口腔がん治療の今後の課題について考察したので報告する。

● MEMO ●

---

## 15 当科における細胞診の臨床的検討および有用性について

○浅倉 彬 人 御代田 駿 菅野 勝 也 川原 一 郎  
浜田 智 弘 金 秀 樹 高田 訓

奥羽大学歯学部口腔外科学講座口腔外科学分野

.....

**【はじめに】** 細胞診は口腔がんのスクリーニング検査として有用性が高いとされている。また、患者に対する外科的侵襲が少なく、安価で繰り返し検査が可能である。そこで今回、口腔粘膜疾患に対する細胞診検体を解析し、その内訳および有用性について検討を行ったのでその概要を報告する。

**【対象と方法】** 平成25年4月から平成28年3月までの36ヶ月間に当科で細胞診を施行した185例を対象とした。対象患者の診療録より回顧的に検討を行った。

**【結果】** 対象症例のうち病理組織学的検査を施行した症例は60例であった。悪性腫瘍は30例含まれており、細胞診でclassⅢ以上であったものは27例、classⅡ以下であったものは3例であった。

**【まとめ】** スクリーニング検査として細胞診の有用性が示唆された。今後、口腔がん検診で細胞診が広く取り入れられることを期待する。

● MEMO ●

---

## 16 姿勢が下顎位に及ぼす影響

○石川佳和

青森県歯科医師会会員 医療法人 愛和会 桜川歯科医院

.....

**【はじめに】** 現代人は、PC、スマホ等で前屈みになり、身体の重心に狂いを生じる。前傾姿勢は、肩と首の筋肉を異常に緊張させるため、下顎位を不安定にさせ顎関節に異常を生じさせる。

**【方法】** 被験者は、桜川歯科医院スタッフ、家族、患者の合計153名、平均年齢38.5歳である。2013年4月から2015年11月までの間、姿勢測定・評価システム、足圧測定・分析システム、デンタルプレスケールを使用し、姿勢ストレッチ前後の状態を測定、分析し、比較した。

**【結果および考察】** 姿勢ストレッチ前の姿勢はアンバランスで、足圧は踵重心で、咬合は咬合の重心から外れていた。姿勢ストレッチ後の足圧は身体重心と近似し、咬合は咬合の重心に近づいた。姿勢ストレッチをしたことで姿勢が良くなり、身体の重心が整い、筋バランスが取れたので下顎位が安定したものと考えられる。姿勢ストレッチは、顎関節症予防に密接な関係があることが示唆された。

**【利益相反】** 本報告について利益相反はない。

● MEMO ●

---

## 17 米沢方式を活用した児童・生徒のCO・GOの実態調査

○山 田 雄 大<sup>1)</sup> 安 藤 栄 吾<sup>1)</sup> 松 岡 勲<sup>1)</sup> 大 峽 潤<sup>1)</sup>  
村 山 敏 明<sup>1)</sup> 平 間 和 広<sup>1)</sup> 渡 部 宏 一<sup>1)</sup> 鈴 木 基<sup>1)</sup>  
林 隆 一<sup>1)</sup> 結 城 昌 子<sup>2)</sup> 廣 瀬 公 治<sup>2)</sup>  
米沢市歯科医師会<sup>1)</sup> 奥羽大学歯学部口腔衛生学講座<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】** 米沢市歯科医師会では平成7年度から学校歯科保健活動の一環として、定期歯科健康診断でのCO・GO保有者にも精密健査と保健指導の受診を勧める、いわゆる「米沢方式」を推進してきた。そこで、CO・GOの保有者で「受診の勧め」を持って地域の歯科医院に来院した児童・生徒の実態を報告する。

**【対象および方法】** 調査対象者はH7～27年度に米沢市立の小・中学校に在学し、定期歯科健康診断を受診した児童・生徒のCO・GO保有者で、6月中に「受診の勧め」を持参して来院した者とした。調査項目は学校健診からCO・GOの保有状況と、医院での精密検査および事後措置の調査、集計を行った。

**【結果および考察】** 学校健診後のCO精密検査結果では、60%弱がCOと判定され経過観察に、健全歯へは20%弱、う蝕歯経験歯へは25%前後が移行していた。一方、GOの精査では60%前後保有すると判定され、健全歯肉へ10%前後、Gへは30%弱が移行していた。

● MEMO ●

---

## 18 8020 推進、達成を考える（第6報）

○吉川 哲也（青森市開業）      櫻井 省一（青森市開業）  
梅村 英之（弘前市開業）      渡辺 康一（弘前市開業）  
新井田 進一（八戸市開業）      谷地 忍（八戸市開業）  
青森県歯科医師会会員

.....

**【はじめに】** 第62回本学会（第1報）において、かかりつけ歯科医を持たず、初めて各歯科医院を受診した初診患者の歯みがき指導受療経験は、診療室での対面、聴き取り調査の結果35.8%と低かったこと、また、一人平均現在歯数、20歯以上保有者率は平成17年歯科疾患実態調査結果に比べて、歯数が少なく、保有者率も低いことを第63回本学会（第2報）で報告した。さらに、6年後の昨年、以前と同様の調査を行い、第68回本学会（第5報）において、歯みがき指導受療経験は46.3%に増加したことを報告した。今回は、その際同時に精査した、主として現在歯数、20歯以上保有者率、加えて平成23年歯科疾患実態調査結果との比較検討を行ったので報告する。

**【方法】** 青森、弘前、八戸市の計6ヶ所の歯科医院を平成25年から27年に受診した初診患者、総数749名について調査した。

**【結果】** 歯科疾患実態調査に比べ、臨床的資料の本調査結果は、歯数が少なく、保有者率は低かった。

**【利益相反】** 本報告について利益相反はない。

● MEMO ●

---

○池山 丈二<sup>1)</sup> 海野 仁<sup>1)</sup> 金子 振<sup>1)</sup> 小坂 健<sup>2)</sup>  
篠田 壽<sup>2)</sup> 佐々木 啓一<sup>2)</sup> 廣瀬 公治<sup>3)</sup> 大野 敬<sup>3)</sup>  
福島県歯科医師会<sup>1)</sup> 東北大学大学院歯学研究科<sup>2)</sup> 奥羽大学歯学部<sup>3)</sup>

.....

**【はじめに】** 福島県歯では、福島第一原発事故を受け、県内に在住する子供の乳歯に放射性物質が含まれているか調査するため県歯、東北大学大学院歯学研究科、奥羽大学歯学部の三者により「ヒト歯を用いた被ばく線量評価事業」を開始している。今回、乳歯の収集に関する県歯の取り組み等を中心に報告する。

**【方法】** 乳歯収集は県歯会員所属の各医療機関で子供の保護者に対し説明及び同意を得て実施され、また県歯からコントロールとして日本各地の歯科医師会に乳歯収集の協力を依頼した。本事業は福島県歯倫理委員会の承認を得て実施、また環境省「放射線の健康影響に係る研究調査事業」より予算支援を受ける。

**【結果】** 現在（平成28年5月末）までに県内外で合わせて4,504本の乳歯を収集している。

**【考察】** 現在までに収集した乳歯は3.11以前に形成された歯であり今後、原発事故後に形成された乳歯との比較が、放射線被ばくの影響を調べる上で重要となる。

※利益相反はない。

● MEMO ●

---



## ヒト歯を用いた被ばく線量評価事業 — 原発事故前に形成された乳歯の検討 —

○高橋 温<sup>1)</sup> 清水 良央<sup>1)</sup> 千葉 美麗<sup>1)</sup> 鈴木 敏彦<sup>1)</sup>  
小荒井 一真<sup>2)</sup> 岡 壽崇<sup>2)</sup> 西山 純平<sup>2)</sup> 木野 康志<sup>2)</sup>  
小坂 健<sup>1)</sup> 篠田 壽<sup>1)</sup> 佐々木 啓一<sup>1)</sup>

東北大学大学院歯学研究科<sup>1)</sup> 東北大学大学院理学研究科<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】**我々は、個体の内部被ばく状況を知る上で歯が重要な指標となり得ると考え、福島県歯科医師会、奥羽大学歯学部と提携し全国より乳歯を収集している。今回、収集地域により歯質中の放射性物質濃度に違いがあるかどうかを検討した。

**【方法】**平成26年1月から平成27年8月までに収集された3600本の歯を対象として、その中に含まれる放射性物質の濃度が収集した地域により違いがあるかどうかについてイメージングプレートを用いたオートラジオグラフィにより検討した。

**【結果】**福島県と対照各県から収集された歯質中の放射性物質濃度に特に違いを認めなかった。また、福島県主要都市間における違いも認めなかった。

**【考察】**今回検討した歯は、事故前に形成された乳歯であり、やがて収集されるであろう事故後に形成された歯の対照歯として位置づけられる。今後はこれらのデータを基礎として原発事故以降に形成された歯についての評価を行う予定である。

● MEMO ●

---

## 東北大学病院における摂食嚥下治療センターの 取り組みと摂食・嚥下障害の実態調査

○石河理紗<sup>1)</sup> 小山重人<sup>1)</sup> 佐藤奈央子<sup>1)</sup> 細川亮一<sup>2)</sup>  
松井裕之<sup>3)</sup> 松舘芳樹<sup>1)</sup> 加藤健吾<sup>4)</sup> 香取幸夫<sup>4)</sup>  
小関健由<sup>2)</sup> 佐々木啓一<sup>3)</sup>

東北大学病院・顎口腔再建治療部<sup>1)</sup> 東北大学大学院 歯学研究科・予防歯科学分野<sup>2)</sup>

東北大学大学院 歯学研究科・口腔システム補綴学分野<sup>3)</sup>

東北大学大学院 医学研究科・耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野<sup>4)</sup>

.....

**【はじめに】** 近年、摂食・嚥下障害も注目されている。東北大学病院ではこれまでも口腔期に問題を抱えた摂食・嚥下障害患者に対しPAPや顎義歯の装着を行ってきた。しかし、実際に口腔期に障害を有するものの割合や補綴的介入の頻度や効果は不明瞭であった。そこで、本研究では平成27年10月に当院耳鼻咽喉・頭頸部外科とともに立ち上げた摂食嚥下治療センターの受診者を対象に、原疾患や障害の要因、口腔内状態、補綴学的介入の頻度およびその効果について検討を行った。

**【方法】** 平成27年10月から平成28年7月まで東北大学病院摂食嚥下治療センターを受診した患者について、全身状態、摂食嚥下機能および口腔機能、補綴状況を調査した。

**【結果及び考察】** 対象患者はのべ284名（男性178名、女性106名）で頭頸部腫瘍や脳血管障害を原疾患とする者が多かった。摂食嚥下障害と診断された者は約80%で、口腔期障害を有する者は60%以上であった。

● MEMO ●

---

## 帰宅困難地域の仮設住居入居者に対する口腔ケア推進事業

○瀬川 洋<sup>1)</sup> 大橋 明石<sup>1)</sup> 板橋 仁<sup>2)</sup> 高田 訓<sup>3)</sup>  
池山 丈二<sup>4)</sup> 金子 振<sup>4)</sup>

奥羽大学歯学部口腔衛生学講座<sup>1)</sup>

奥羽大学歯学部成長発育歯学講座歯科矯正学分野<sup>2)</sup>

奥羽大学歯学部口腔外科学講座<sup>3)</sup>

福島県歯科医師会<sup>4)</sup>

.....

**【はじめに】** 福島県内の帰宅困難地域の仮設住宅入居者に対する口腔ケア推進事業を昨年引き続き、実施して事業内容の評価と今後の課題を見だし検討したので報告する。

**【対象と方法】** 本事業に同意が得られた福島県内の仮設住宅の入居者47名を対象に福島県歯科医師会を実施主体として、奥羽大学の協力のもとに、支援平成27年11月～平成28年2月までの3回実施した。本事業は奥羽大学倫理調査委員会（承認番号第95号）の承認を得て行った。なお、開示すべき利益相反はない。

**【結果および考察】** ストレス測定の結果、「ストレスがなし」が66.0%で、口腔乾燥度測定の結果は正常2.1%、境界12.8%、軽度乾燥42.6%、中等度乾燥23.4%、重度乾燥19.1%であった。総務省は避難生活の長期化などによるストレスが原因で唾液の分泌量が減り、口腔内が乾燥している被災者が増加するとの見解を示しているが本事業でも同様の傾向が認められたので事業の継続実施の必要性が示唆された。

● MEMO ●

---

## 23

## 県立中部病院緩和ケア病棟における医科歯科連携の取り組み

○高橋 綾<sup>1)</sup> 前川 洋<sup>1)</sup> 齋藤 英朗<sup>1)</sup> 中村 ますみ<sup>1)</sup>  
 遠藤 忠治<sup>1)</sup> 千葉 寛子<sup>1)</sup> 米持 武美<sup>1)</sup> 及川 陽次<sup>1)</sup>  
 宮澤 裕一郎<sup>1)</sup> 佐藤 保<sup>1)</sup> 高橋 良明<sup>2)</sup> 畠山 良彦<sup>3)</sup>  
 星野 彰<sup>4)</sup> 遠藤 秀彦<sup>4)</sup>

岩手県歯科医師会 口腔保健センター事業運営委員会<sup>1)</sup> 北上歯科医師会<sup>2)</sup>  
 花巻市歯科医師会<sup>3)</sup> 岩手県立中部病院<sup>4)</sup>

【はじめに】岩手県立中部病院は平成21年4月に開院した岩手県中部地域の中核病院である。390床の一般病棟と共に、24床の緩和ケア病棟を有し、25科ある診療科に歯科がないため、地域の歯科医師と連携して診療にあたっている。

【方法】岩手県立中部病院緩和ケア病棟では、開院時から地域の歯科医師がNST回診と共に、緩和ケア病棟に入院している患者に対しても歯科回診を行っている。平成23年度からは、緩和ケア歯科回診をNST回診から分離し、平成26年度からは緩和ケア歯科回診を毎週行うようになった。

【結果】NST回診から緩和ケア歯科回診を分離し、丁寧な診察をしたことにより地域の歯科医師により、平成26年度は65件の歯科回診と23件の訪問歯科診療が行われた。回診人数や訪問歯科診療の依頼件数が増加したと考えられる。

【結論】緩和ケア科における歯科の需要は高く、歯科が介入することで患者のQOLの向上に効果があった。

● MEMO ●

## 24 一般開業歯科医院である当院におけるがん患者への 歯科的対応 — 周術期から終末期まで 48 例の検討 —

○菅野真人<sup>1,2)</sup> 松岡幸子<sup>1)</sup> 大沼可名美<sup>1)</sup> 蓬田諒子<sup>1)</sup>  
太田マキ<sup>1)</sup> 菅野由香里<sup>1)</sup>

太田歯科医院<sup>1)</sup> 宮城県歯科医師会会員<sup>2)</sup>

.....

**【はじめに】** 一般開業歯科医院である当院において、支持療法として歯科的対応を行った、がん患者についての検討を行った。

**【方法】** 当院を受診した治療前、治療中、治療後、終末期のがん患者で、がん治療担当医と連携を取った症例（依頼もしくは当院からの文書提供等での連携症例）48例を検討した。

**【結果および考察】** 化学療法に関する患者が20例、在宅緩和ケアを受けている患者が21例と多かった。化学療法症例では感染源への対応などが多くあり、終末期症例では口腔乾燥やカンジダ性口内炎への対応が多かった。また、骨吸収抑制薬（ビスフォスフォネート製剤、抗RANKL抗体）が7例、血管新生阻害薬が2例で投与されており、顎骨壊死への配慮が必要な症例も少なくはなかった。

当院のような一般開業歯科医院においても、がん治療担当医との連携が必要ながん患者は多く、各々の状態に合わせた対応が必要であると考えられた。

● MEMO ●

---

## 25 米沢市歯科医師会の医療連携の取り組み

11:20

○安藤 栄吾 平 幸雄 山崎 宙 松岡 勲  
大 峽 潤 満田 隆之 渡部 宏一 村山 敏明  
遠藤 浩 鈴木 基 平間 和広 五十嵐 栄  
林 隆一

一般社団法人 米沢市歯科医師会

.....

**【はじめに】**平成27年度に米沢市歯科医師会は山形県在宅医療推進事業に参加する等、様々な活動を展開したので報告する。

**【方法】**山形県在宅医療推進事業、山形県医療連携強化事業等へ参加し、在宅訪問歯科診療の推進や他職種との医療連携の強化を図った。

特に山形県在宅医療推進事業では、歯科以外の職種や市民、歯科衛生士を対象にした口腔ケア研修会の開催、本会会員による介護施設等での講話の実施、介護認定申請者を対象に在宅訪問歯科診療についてのアンケートの実施や訪問歯科診療を推進するパンフレットの配布、本会の代表者による先進地の視察を行った。

**【経過および考察】**本年度米沢市歯科医師会が行ったこれらの事業を通して、他職種と本会との交流が一層深まったことを実感することができた。アンケートの解析から今後の医療連携の課題や患者のニーズの一端をうかがい知ることができた。本年度の事業は、さらに有用な医療連携を構築する礎となったと確信している。

● MEMO ●

---

## 26 要介護5から通院になった在宅患者

○五十嵐 雄 一

山形県歯科医師会会員

.....

**【はじめに】** 要介護5から外来通院可能となった在宅患者を経験したので報告する。

(症例) 84歳女性、心不全、肺炎で病院入院。退院当日、食事が食べられない、義歯が合わないとの主訴で訪問歯科依頼。

**【治療経過】** H27年4月訪問診療依頼、翌日訪問初診した。食形態はミキサー食と栄養補助食品であった。その後義歯修理し在宅にて嚥下内視鏡を実施しながら食形態を上げていった。6月にはご飯とコロッケなど普通食の形態にまでアップした。H28年3月歩行で歯科医院に娘さんと突然来院した。

**【考察】** 在宅患者さんに訪問歯科診療と食の支援を行い、寝たきりから著しく回復し歩いて通院できるようになった症例を経験した。口から食べること、機能する義歯にすること、嚥める食形態にすること、長期間関わることの重要性を再確認した。

● MEMO ●

---

## 27 山形大学医学部附属病院における周術期口腔管理の現状と課題

○山 森 郁 井 場 明日香 遊 佐 和 之 北 畠 健一朗  
飯 野 光 喜

山形大学医学部 歯科口腔・形成外科学講座

.....

**【はじめに】** 当科における周術期口腔機能管理（以降周管）算定の実態を調査し、他施設と比較するとともに今後の課題について検討したので報告する。

**【対象】** 平成24年4月から平成28年3月までの間に山形大学医学部附属病院歯科口腔外科に院内紹介された2,287名の内、周管計画書を作成した878名を対象に、周管料算定状況、紹介元診療科、対象疾患について調査した。

**【結果】** 周管対象患者は、平成25年度以降院内紹介患者の半数を占めていた。平成26年度の紹介元診療科は呼吸器外科・心臓血管外科が140件で最多であった。当院における周管対象手術は平成26年度536件で、そのうち周管Ⅱ（術前）を算定したのは191件（算定率31.1%）だった。全国国立大学附属病院における周管Ⅱの算定率は平均42%であった。

**【結論】** 当院における周管Ⅱの算定率は、全国平均に比べまだ低い。算定率向上のため、院内紹介システムの構築が必要である。

● MEMO ●

---



## 秋田県湯沢雄勝地区における在宅歯科診療の普及状況 — 2009年、2013年、2016年の比較 —

秋野博尚	秋野一尚	姉崎研哉	大友義信
大友佳壽	大山賢二郎	小原妥子	勝部朝之
木村貞昭	小菅一弘	小番孝司	小番健司
佐藤達児	佐藤達	佐藤達志	佐野治義
柴田貞彦	志水透	莊司薫	瀬川雅己
高橋章子	高橋克彦	高橋寿	高橋亮
田尻聡	長澤大	新山重美	芳賀久志
三澤健士	守口修	○山中恒明	山本弘助

秋田県 湯沢市雄勝郡歯科医師会

【はじめに】湯沢雄勝地区は秋田県内陸南部の1市1町1村からなる地区である。湯沢市・雄勝郡歯科医師会では、2009年に1回目、2013年に2回目の在宅歯科診療の実態調査を行っており、今回3回目の調査を行った。過去2回の調査と比較・検討したので報告する。

【方法】当歯科医師会加入の歯科医療機関に対し無記名によるアンケート調査を行った。

【結果】訪問診療実施率は46.2%から68.0%へと年々増加していた。また、在宅および施設への訪問回数も同様に増加傾向がみられた。

【考察】訪問人数については2013年が突出して多かったが、行政主導の在宅健診の影響と考えられる。年間の訪問人数は増加傾向にあるものの、350人前後である。

当地区での後期高齢者数は13,363人、要介護認定者は4,503人であり、未だに口腔内の問題が放置されている場合が多いと考えられる。

● MEMO ●

## 岩手県歯科医師会におけるがん診療医科歯科連携の 取り組み（第3報）

○齊 藤 英 朗    前 川        洋        中 村 ますみ    遠 藤 忠 治  
千 葉 寛 子    及 川 陽 次    米 持 武 美    高 橋        綾  
宮 澤 裕 一 郎    前 川 秀 憲    佐 藤        保

岩手県歯科医師会 口腔保健センター事業運営委員会

.....

**【はじめに】** 岩手県歯科医師会口腔保健センターでは、平成24年度の診療報酬改定で周術期口腔機能管理料の算定が可能になる以前から、岩手県内の各地域でがん診療医科歯科連携を推進してきたのでその経過を報告する。

**【方法】** がん診療医科歯科連携協議会では、地域の拠点病院と地区歯科医師会が協議できる場を提供してきた。またDVD講習の開催や地区への講師派遣で、受講率、研修率の向上を図ってきた。平成25年からは、各県立病院および地区の連携状況の調査を行い、調査結果を情報発信してきた。

**【結果】** これらの活動の結果、平成25年度には414人、平成26年度には512人、平成27年度には551人のがん患者が岩手県内の県立病院から歯科医院へ紹介され、岩手県内におけるがん診療医科歯科連携は徐々に構築されている。

**【結論】** 口腔保健センターでは、今後も地域における医科歯科連携の支援をしていきたい。

● MEMO ●

---

## 30 当科における内視鏡下手術についての臨床的検討

○北 畠 健一朗 石 川 恵 生 遊 佐 和 之 山 森 郁  
飯 野 光 喜

山形大学医学部 歯科口腔形成外科学講座

.....

**【はじめに】** 近年、外科手術は低侵襲を目指し、積極的に内視鏡下手術が行われている。内視鏡の利点は直視できない部位を明確に視覚情報として捉えることである。口腔外科領域では、以前より顎関節内障に対して内視鏡が用いられており、現在は様々な疾患に対して内視鏡下手術が行われるようになってきている。当科でも種々の手術に内視鏡を応用しており、今回、その臨床的検討を行ったので報告する。

**【方法】** 2015年10月から2016年4月までの間に当科で内視鏡下手術を施行した症例を対象とし、診断名、手術法、術中所見、術後経過等について調査した。

**【結果】** 症例は13名であり、男性7名、女性6名であった。疾患としては埋伏歯、歯根嚢胞、歯性上顎洞炎、術後性上顎嚢胞等に対して施行した。

**【考察】** 術中はモニターにより死角となる部位の確認が可能であり、神経・血管系の損傷を回避できた。術後経過は全例ともに良好であり、内視鏡の応用は有用と考えられた。

● MEMO ●

---

## 31 インプラント周囲に発生した顎骨中心性癌の1例

12:25

○桑島 精一 中田 憲 石田 昂 福地 峰世  
小澤 諒 五十嵐 秀光 今野 泰典 山崎 雅人  
高野 裕史 福田 雅幸

秋田大学医学部附属病院

.....

**【はじめに】**今回われわれは、インプラント埋入部に生じた扁平上皮癌の1例を経験したので報告する。

**【症例】**80歳男性、H16年に右側下顎臼歯部にインプラント治療を受けた。H26年、インプラント部に疼痛を自覚し、近病院口腔外科を受診した。生検で扁平上皮癌の診断であった。

**【治療経過】**全身麻酔下に頸部郭清術、下顎半側切除術とチタンプレート再建術を行った。合併症はなく、これまで再発なく経過観察中である。

**【考察】**本症例ではインプラント部に扁平上皮癌が認められた。これまでにインプラント部の癌の発生については報告があり、他部位の口腔癌と同様に全身的な因子や喫煙などの局所因子によるものといわれているが、インプラントとの因果関係はわかっていない。インプラント部の癌は、初期にはインプラント周囲炎との鑑別が困難であるので、定期的なメンテナンスが重要であり、不規則な骨吸収が生じた場合には生検を考慮する必要があると考える。

● MEMO ●

---

## 32 口腔癌の予後予測因子についての検討

○山崎雅人 中田 憲 石田 昂 福地峰世  
小澤 諒 五十嵐 秀光 今野 泰典 桑島 精一  
高野 裕史 福田 雅幸

秋田大学医学部附属病院 歯科口腔外科

.....

**【はじめに】** 口腔癌の予後予測因子として、術後因子は多数の報告を認めるが。術前因子の報告は少数であり、術前に予後不良を予測することは困難である。そこで新たな口腔癌の予後不良の術前因子を報告するため、口腔癌予後不良症例をレトロスペクティブに検討した。

**【方法】** 秋田大学医学部附属病院歯科口腔外科で口腔癌と診断し、治療後に予後不良となったStage III/IVの12例とした。検討項目は原発巣、T分類、組織型、原発巣のPET-CTのSUVmax、cN、腫瘍マーカー、CRP、転帰までの期間とした。

**【結果】** 原発巣は下顎歯肉5例、口腔底3例、頬粘膜、上顎歯肉、舌、その他が1例。T分類は4aが9例、3が1例、2が2例。組織型はSCC9例、ACC1例、ASC1例。原発巣のSUVmax平均27.3、中央値20.8、cN+が7例、cN-が5例。腫瘍マーカー異常値は6例。CRP平均0.46、中央値0.08、転帰までの期間平均は18.7ヶ月、中央値14ヶ月であった。

**【考察】** 術前因子として原発巣のSUVmaxは有用である可能性が示唆された。

● MEMO ●

---

## 33 山形大学医学部附属病院歯科口腔・形成外科における 過去14年間の顎矯正手術の臨床統計的検討

○助 川 香 織<sup>1)</sup> 小 林 武 仁<sup>1)</sup> 櫻 井 博 理<sup>2)</sup> 尾 崎 尚<sup>3)</sup>  
濱 本 宜 興<sup>3)</sup> 遊 佐 和 之<sup>4)</sup> 橘 寛 彦<sup>4)</sup> 飯 野 光 喜<sup>4)</sup>

公立置賜総合病院 歯科口腔外科<sup>1)</sup> 日本海総合病院 歯科口腔外科<sup>2)</sup>

山形県立中央病院 歯科口腔外科<sup>3)</sup> 山形大学医学部附属病院 歯科口腔・形成外科<sup>4)</sup>

.....

**【はじめに】** 2002年以降の14年間の当院における顎矯正手術の検討を行ったので報告する。

**【症例】** 2002年から2015年までの14年間に当科で実施した顎矯正手術345症例。

**【結果】** 男性112例、女性233例で手術時年齢は最少5歳、最長52歳で平均は22.5歳であった。診断は下顎前突症（非対称、開咬を含む）が260例と最も多かった。先天異常は口唇裂口蓋裂が4例、Apert症候群、Pfeiffer症候群が各1例であった。年別の症例数では2004年から2006年が30例以上、近年は20例程度であった。術式はSSROが227例、SSRO＋LFⅠが88例などであった。

**【考察】** 今回の結果を1990年から2001年の12年間の臨床統計と比較すると、症例数は189例から345例に増加していた。手術対象に先天異常症例が加わり、LFⅢ型を含む骨延長を施行していたことなど、手術対象患者や術式の多様化が認められた。

● MEMO ●

---

## 34 舌正中に生じた上皮内癌の一例

○五十嵐 弘 樹    本 間 英 明    山 崎 森里生    金 子 哲 治  
工 藤 聖 美    佐久間 知 子    菅 野 寿    長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

.....

**【はじめに】** 舌背正中に発生する疾患の代表例として正中菱形舌炎が知られているが、まれに悪性疾患が生じることもある。今回われわれは、舌背正中に上皮内癌を認め、部分切除を行った症例を経験したので報告する。

**【症例】** 患者は舌背正中に前後に連なる無痛性の境界明瞭な粘膜の肥厚を自覚し、2015年12月に当科を紹介受診した。肥厚は前方のものが11×11mm、後方が19×11mmであった。生検を行い、前方の肥厚は上皮内癌、後方は扁平上皮癌の疑いと診断した。造影MRI所見では上皮内に限局した病変を認めたが、筋層への浸潤は認めなかった。全身麻酔下に舌部分切除を施行した。腫瘤は安全域を設けて切除し、一次縫縮とした。術後の病理組織診断は前方、後方いずれも上皮内癌であった。現在経過観察中であるが舌の形態変化も少なく、嚥下障害、構音障害も認めていない。

**【結論】** 舌背正中に生じた上皮内癌の部分切除を行い、良好に経過している。

● MEMO ●

---

## 35 下顎骨粉碎骨折を伴った多発外傷の1例

○本 間 英 明    五十嵐 弘 樹    山 崎 森里生    金 子 哲 治  
工 藤 聖 美    佐久間 知 子    菅 野 寿    長谷川 博

福島県立医科大学附属病院 歯科口腔外科

.....

**【はじめに】** 今回われわれは下顎骨粉碎骨折に対し観血的整復術を施行し、比較的良好な結果が得られたためその概要を報告する。

**【症例と経過】** 患者：14歳女児。既往歴：パニック障害、解離性障害。現病歴：2014年、自殺企図にて学校3階から飛び降り足から着地後、顔面を強打し受傷した。口腔内からの多量出血、下顎骨折により現場にて経口挿管され当院救急外来に搬送された。下顎骨粉碎骨折、リスフラン関節脱臼骨折等の診断にて、緊急に下顎骨整復術およびピンニング固定術を行った。下顎骨整復術は粉碎骨片を可及的に整復して遊離骨片も含め再建用プレートで可及的に固定し、固定できなかった骨片は、可及的に死腔を埋めるように整復した。2015年、プレート除去術を施行した際には、周囲に軟骨様の硬組織形成を認めた。経過は良好であり現在も経過観察中である。

**【結語】** 下顎骨粉碎骨折に対し、観血的整復術を施行した1例を経験したので報告した。

● MEMO ●

---



## 36 半夏瀉心湯は頭頸部化学放射線治療由来の 口腔粘膜炎を抑制する

○玉原 亨 細川 亮一 丹田 奈緒子 佐久間 陽子  
飯島 若菜 猪狩 真奈 百々 美奈 加藤 翼  
渡辺 俊吾 伊藤 恵美 高橋 久美子 小関 健由

東北大学病院 予防歯科

.....

**【はじめに】** 頭頸部がんに対する化学放射線治療（CRT）は口腔粘膜炎を誘発することが知られている。最近の研究では半夏瀉心湯は口腔粘膜炎の抑制に有効であるという報告がある。そのメカニズムとしては半夏瀉心湯が細菌感染や炎症を抑えることが報告されている。しかしながら、半夏瀉心湯による細胞への直接作用については明らかではなかった。

**【方法】** 東北大学病院において頭頸部がんに対するCRTを施行された患者における半夏瀉心湯の抑制効果を再検討した。さらに頬粘膜 cell line を用いて半夏瀉心湯による口腔粘膜炎抑制のメカニズムを検討した。

**【結果】** 半夏瀉心湯はCRTにおける口腔粘膜炎を抑制することがわかった。また、cell line において半夏瀉心湯は短時間作用においては細胞周期を促進し、長時間作用においては細胞周期を抑制した。さらに抗がん剤であるシスプラチンの細胞毒性に対する抵抗性を促進することがわかった。

● MEMO ●

---

---

**2016**  
**第69回 東北地区歯科医学会**  
**プログラム**

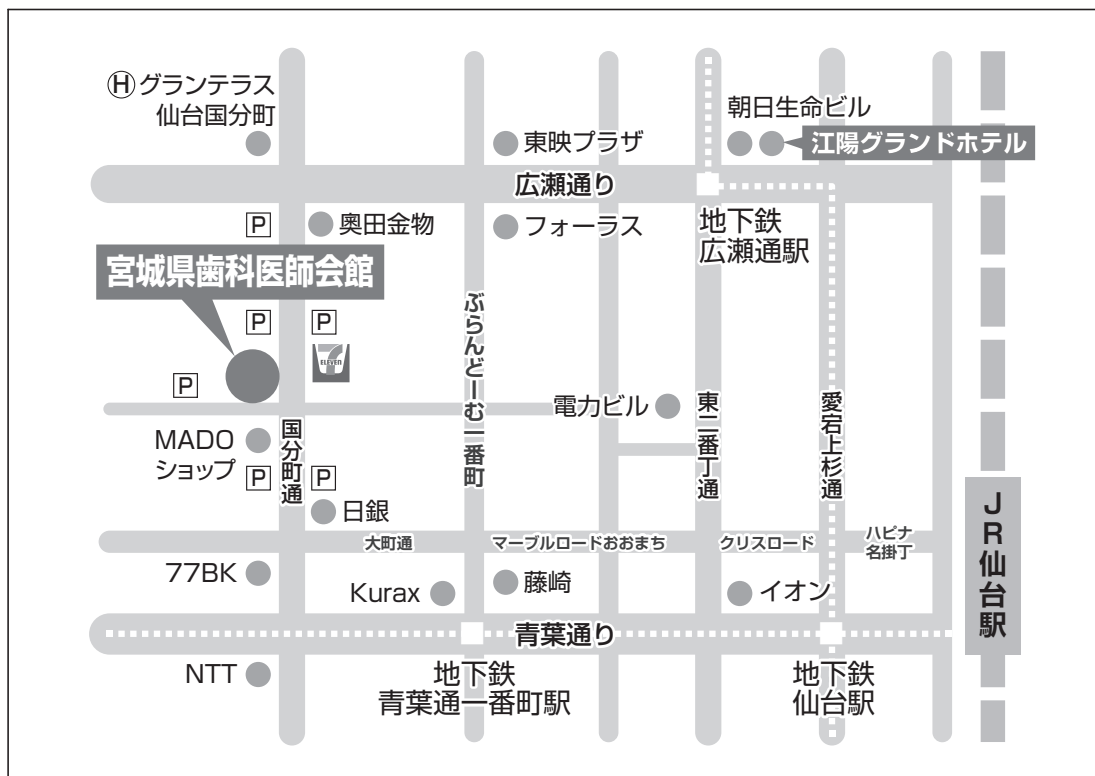
平成28年9月30日発行

**東北地区歯科医師会連合会**  
当番県 **宮城県歯科医師会**  
会長 **細谷 仁 憲**

〒980-0803 仙台市青葉区国分町1-5-1  
TEL 022-222-5960

---

# 学会会場 宮城県歯科医師会館案内図



## 交通機関のご案内

- JR 仙台駅より徒歩 15 分
- 地下鉄／東西線「青葉通一番町駅」より徒歩 5 分  
南北線「広瀬通駅」西 4 出口から徒歩約 8 分
- タクシー／ JR 仙台駅より約 5 分

※会場には駐車場のご用意がありませんので、お近くの有料駐車場もしくは公共の交通機関をご利用下さい。

## ● 懇親会会場 江陽グランドホテル

11月5日(土) 第1日目終了後、懇親会を開催いたします。

多数の皆様のご参加をお待ちしております。

日 時：平成28年11月5日(土) 午後6時30分

会 場：江陽グランドホテル (学会会場より徒歩約8分)

仙台市青葉区本町2丁目3番1号 TEL 022-267-5111

